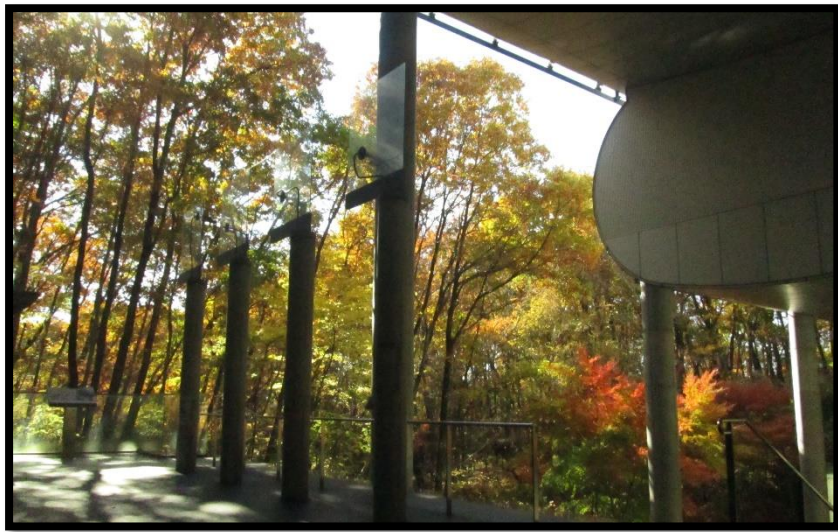


令和6年度
北日本図書館連盟研究協議会
兼宮城県公共図書館等職員研修会Ⅲ
記録集



期日 令和6年12月13日(金)

会場 宮城県図書館 2階 ホール養賢堂

■主 催■

北日本図書館連盟
宮城県公立図書館等連絡会議
宮城県図書館

■後 援■

公益社団法人日本図書館協会

目 次

令和 6 年度北日本図書館連盟研究協議会兼宮城県公共図書館等職員研修会Ⅲ開催要項	1
理事長挨拶:北日本図書館連盟理事長(秋田県立図書館長) 伊藤 成孝 氏	5
(1)基調講演「地域社会の主体を担う図書館とは～変革する図書館力～」	7
(2)事例発表① 一戸町立図書館「地域の懸け橋としての図書館」.....	19
事例発表② 石狩市民図書館「地域とつながる図書館」	23
事例発表③ 角田市図書館「行政情報を地域へ」	27
(3)総評	31
主催者挨拶:宮城県図書館長 青木 直之	39
次期開催県挨拶:福島県立図書館長 深谷 一夫 氏	40

令和6年度北日本図書館連盟研究協議会
兼宮城県公共図書館等職員研修会Ⅲ開催要項

1 研究主題

「多様な学びや活動を支える図書館」

2 趣旨

近年、新型コロナウイルス感染症への対応や様々な場面におけるデジタル化の進展など、社会の急速な変化の下、図書館は生涯学習の拠点として、今後も社会の中で知識や情報の入手と活用が重要となります。この知識や情報は生涯学習の基盤となり、多様な学びや活動を支えると考えられます。地域の知的基盤としての図書館はどうあるべきか、高度化する利用者ニーズへどう応えるべきか対応を求められています。今回の研究協議会は、図書館を取り巻く環境を理解し、今後の図書館の在り方について思考を深めることを目的として開催するものです。

3 主催

北日本図書館連盟・宮城県公立図書館等連絡会議・宮城県図書館

4 後援

公益社団法人日本図書館協会

5 日程

令和6年12月13日（金） 12時30分から16時00分まで

「Webex meetings」での入室は12時15分から可

12:30	12:45	13:00		14:00	14:10		15:10		15:45	16:00
受付	開会	基調講演	休憩	事例報告		総評・意見交換等	閉会			

6 会場

宮城県図書館 2階ホール養賢堂

「Webex meetings」での参加も可能です。（オンライン併用）

7 対象者

北日本図書館連盟参加館及び宮城県内公共図書館等の職員、学校図書館職員、図書館に関心のある方（会場40人・Web参加50人程度）

8 内容

(1) 開会行事

理事長挨拶：北日本図書館連盟理事長（秋田県立図書館長） 伊藤 成孝 氏

(2) 基調講演

講師：鎌倉 幸子 氏

「地域社会の主体を担う図書館とは～変革する図書館力～」

(3) 事例発表

事例発表者①：一戸町立図書館「地域の懸け橋としての図書館」

事例発表者②：石狩市民図書館「地域とつながる図書館」

事例発表者③：角田市図書館 「行政情報を地域へ」

(4) 総評

コーディネーター：鎌倉 幸子 氏

(5) 閉会行事

主催者挨拶：宮城県図書館長 青木 直之

次期開催県挨拶：福島県立図書館長 深谷 一夫 氏

※いずれも手話通訳を行います。

9 参加費

無料

10 参加申込

(1) 申込方法

下記の申込フォームからお申し込みください。

申込フォーム：

<https://www.library.pref.miyagi.jp/limesurvey/index.php/326179?lang=ja>

※宮城県図書館ホームページ及び下記 QR コードからもお申し込みできます。

※電話、FAX での申込は受け付けておりません。

(2) 申込期限

令和6年11月20日（水）17時



11 その他

(1) 昼食は各自で済ませてから御参加ください。

なお、宿泊の斡旋は行いませんので、各自で手配してください。

(2) 会場参加者が定員を超える場合、Web による参加へ調整させていただく場合がありますので、あらかじめ御了承願います。

(3) Web による参加の場合は、後日、電子メールで参加 URL を送付します。

事前に接続テストは行いませんので、接続に不安な方は事務局まで御連絡ください。

(4) 駐車場は宮城県図書館の利用者も使用するため、可能な限り公共交通の利用をお願いします。

(5) 会場へのアクセスについては、下記のとおりです。宮城県図書館のホームページからも確認いただけます。[\(https://www.library.pref.miyagi.jp/\)](https://www.library.pref.miyagi.jp/)

■地下鉄とバスで来館される時

地下鉄泉中央駅から宮城交通バスをご利用ください。

「泉パークタウン方面」宮城大学・工業団地経由泉パークタウン車庫前行、テクノヒルズ東行（バスプールの3番のりば）です。将監殿経由は6番乗り場からご乗車下さい。

「宮城県図書館前」が最寄りのバス停です。（乗車時間：20分～30分）

■自家用車御利用の場合

○仙台市内からの場合(その1)

①国道4号線バイパスを大崎方面に進む。

②東北自動車道泉インターチェンジを越えてから2つ目の信号を左折する。

③約4km先の右手側です。

○仙台市内からの場合(その2)

①県道大衡仙台線（水の森～桜ヶ丘～宮城学院女子大学前～長命ヶ丘）を北進する。

②泉パークタウン入口から約2km先の左手側です。

○大崎方面からの場合

①国道4号線バイパスを仙台方面に進む。

②仙台市境から2つ目の信号を右折する。

③約4km先の右手側です。



令和6年度北日本図書館連盟研究協議会
実行委員会事務局（宮城県図書館内）

Mail kikaku@library.pref.miyagi.jp

TEL 022-377-8443

理事長挨拶

北日本図書館連盟理事長(秋田県立図書館長) 伊藤成孝

皆さん、こんにちは。北日本図書館連盟理事長を務めております、秋田県立図書館長の伊藤成孝と申します。開会にあたり、一言御挨拶申し上げます。

まず、令和6年度北日本図書館連盟研究協議会が、北海道、東北各地の図書館関係の皆様にご参集いただき、対面及びオンラインで開催できますことに、心から感謝を申し上げます。開催にあたり、運営にご尽力いただきました宮城県公立図書館等連絡会議並びに宮城県図書館の皆様には厚く御礼申し上げます。

また、6月に開催されました第75回北日本図書館大会青森大会が成功裏に終了いたしましたことに、青森県の図書館関係の皆様には、この場を借りまして改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

さて、世の中が急激に変化していく中で、図書館は地域の多様な学びや活動を支える生涯学習の拠点であり続けなければなりません。その意味で図書館は重要な役割を担っており、そのあり方や利用者のニーズにどう応えていくのか対応を求められています。本日はまさに、「多様な学びや活動を支える図書館」を研究主題として、今後の図書館の在り方について考えてまいります。

また、かまくらさちこ株式会社代表取締役鎌倉幸子様からは、「地域社会の主体を担う図書館とは～変革する図書館力～」と題し、御講演いただきます。さらには、一戸町立図書館主任司書畠山美幸さん、石狩市民図書館主任工藤直揮さん、角田市図書館副館長加藤理江さんからは事例発表をしていただきますが、課題解決につながる貴重な示唆をいただけるものと大いに期待しております。

毎日の業務に熱心に取り組まれている皆様、共通の課題意識を持ち寄り、研鑽を積み、少しでも今後の業務に還元していただき、各館におけるサービスの向上につながることを祈念申し上げ、開催にあたっての挨拶といたします。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

基調講演

地域社会の主体を担う図書館とは ～変革する図書館力～ かまくらさち株式会社代表取締役 鎌倉幸子 氏



皆様、こんにちは。今日はこの貴重なお時間をいただきましてありがとうございます。今、御紹介いただきましたが、私はもともと青森県弘前市出身です。あと3週間経つと、もうお正月ですが、お正月には実家の弘前市の方にずっといる予定です。東北でこのような機会をいただいたことを大変うれしく思います。また、先ほどのプロフィールの中にもありましたが、今、能登半島地震の被災地でブックカフェという移動図書館のような活動を行っております。私は前職では、公益社団法人シャンティ国際ボランティア会という国際協力の団体で、東日本大震災の後に岩手県を走る移動図書館プロジェクトからスタートして、宮城県を走る移動図書館プロジェクト、そして福島県を走る移動図書館プロジェクトと3県で移動図書館活動をさせていただいておりました。そういう御縁もありまして、お久しぶりの皆様もいらっしゃり、大変うれしく思います。

今日は、「地域社会の主体を担う図書館とは」というお話をさせていただきます。先ほど一般社団法人インパクトマネジメントラボの共同代表をやっているという紹介がありましたが、インパ

クトマネジメントラボの事業は、いわゆる社会的なインパクト、この事業がどのような成果だったり、インパクトだったりを生み出しているか、という評価の仕事をしております。やはり、最近よく問われますよね、「図書館ってどういうインパクトを生み出しているの?」とか「図書館って結局価値があるの?」のような、なかなか言語化できないものがあります。それは図書館に限りませんが。現在、博物館・ミュージアムやNPO法人の事業の評価のプロジェクトを何本か担当している中で、その地域社会の主体を担う図書館がどのような視点で地域の人と活動しつつ、且つどのような視点で価値を知ってもらえるか、そういうお話ができたらなと思っております。少し技術的な言葉も多くなってしまうとは思いますが、話題提供としてお話をさせていただければなと思っております。

【講演の目的：多様な学びを支える図書館】

今回の研究主題である「多様な学びや活動を支える図書館」ですが、評価しかり事業形成しかり、最初に考えることとして、地域を支えたいとか、地域を元気にしたいとか色々あると思います。ただ、地域というのは人、一人ひとりで構成されているものですので、やはり最初は、「誰の多様な学びや活動を支えるか」、ここからスタートかなと私は思っております。

日本語は主語を外しても言葉が通じる言語なので、「多様な学びや活動を支える図書館」は主語がなくても理解できるのですが、我々が誰の方向を見ているのかということは常に意識していきたいと思っています。もちろん、「すべての人に図書館を」なので「すべての人」ということは、どうしても考えていかなければならないのですが、「すべての人」を考えるとそこで思考が止まってしまう

こともあるかもしれません。特に情報を必要としている人などに焦点を置かれることが多いと思いますが、まずは出会った人、聞いた声、その地域が抱えている課題とは何かを考えます。課題については、例えば、町の総合計画や教育大綱・教育基本計画等々に載っているかもしれませんので、そういったマクロのデータも含め検証します。また、図書館という強みはカウンターがあって、人一人ひとりと触れ合う機会もある中、そういう声を聞き誰が何を必要としているのかを考えると、そこからスタートしていきたいなと思っております。

今回の講演でいただいたお題というのが、「地域基盤としての図書館の役割を考えていこう」ということが一つ、そして「社会の変化に伴う利用者ニーズを理解していこう」という二つですね。

今、図書館を取りまく環境が変わってきたと思います。例えば、コロナ禍を経て、急激に浸透したデジタルの社会。今、すごいですよね、この宮城県図書館のcockpitのようなオンライン配信の様子を見て、本当にデジタル化というのは避けられぬことで、その中でいかに図書館がデジタル化に対応していくか等も問われている時代になってきていると思っています。

ちょうど昨日は博物館関係の仕事をしていた中で、博物館も物の展示だけではなく、その地域の持っている文化財をデジタル化して広く知ってもらうことで、世界のどこにいらなくても作品に触れることができたり、研究者の研究をより進化させていかなければならない、という声を聞きました。このように時代が変われば使うツールもどんどん変わっていくので結局どれをどう使ってどう対応していこうとか、予算もある中でどうしようとか、そうやって問われている時代ですよ、と教えてもらいました。図書館もそういうところに

直面しているのだなと思っています。それこそ SNS も前は Facebook と X をやっていたら、「SNS 使っていた」と言えたのですが、最近は Youtube がどうだとか、TikTok がどうだとか時代が変われば新しいツールも出てきて、どうしていこうかなと思っていても結局何も手につけないで終わってしまうということもあるのかなと思います。現状維持は楽ではあるのですが。とは言いつつ、時代に踊らされて「どうしよう、どうしよう」と言うのも少し悲しい事だなと思っています。私は、図書館は図書館でどっしり構えていいと思うところもあります。

【近年の多様な学びと図書館の存在意義】

「多様な学び」とはどのような学びとなっているか。例えばオンライン学習。e ラーニングに関しては、私も Udemy (ユーデミー) とか Schoo (スクー) などオンラインで勉強できるサイトで勉強したりしています。オンライン学習は無料で見ることができるものもあるのですが、良質な講座は有料なものもあったりしますね。余談にはなるのですが、ニューヨーク公共図書館では、利用者カードを持っているとアメリカのあるオンライン講座が見放題で、学びたいけれどお金を払えない方が学びの機会を得られるようなサービスも提供されていました。最近では、日本の図書館の中にも、オンライン学習の会社と組んで、図書館の中では受けられるとかそういうことをやっていらっしゃる場所もあると聞いております。

最近は AI ですよね。個別最適化学習という AI を活用した学習アプリというものも出ています。昔は、塾に行かずにオンラインで英会話学習ができるということまではあったんですよ。でも最近よくスマホの広告で見るのは AI の先生との英会

話でのやり取りの中で弱点を見つけてくれて、おすすめの学習を組んでくれるというような AI を活用した学習アプリが結構増えたなということがありますし、そこは無視できないなあと思います。あとは、学校でもタブレットを持つ時代なので IT を活用したプログラミング教室などの授業もありますよね。私が子供の頃は、プログラミングなんて夢のまた夢で、エンジニアしかできないようなものを今学校で習う時代になっています。そんな中、図書館はそれにどう対応しなければいけないのかと焦られている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。あとはワーク・ベースド・ラーニングというインターンシップですね。今インターンシップもオンラインでできる時代でもあります。私の今いる、NPO 法人エファジャパンという海外での活動を行っている団体でも、昨日は徳島県からインターンの希望が来ました。インターネットで話しながらとか、インターネット会議もアバターで動いているとかそういう環境になっています。

あとは、学びの場の地域活動。ここは、もうコミュニティカフェとかリアルなところがあります。インクルーシブ教育、障害の有無にかかわらず学べる環境整備。これは図書館でよくある視聴覚資料などですね。あとはマルチメディアデイジーとか。これは、昔からあるものなので大丈夫かなと思います。あとは、リスキングという社会人学び直しの機会。これは、IT というよりは社会人向けの学び直しの機会をこれから伸ばしていこう、という国の政策でも強くうたわれているところでもあります。

こういういろいろな学びのスタイル・学びの方針、地域のコミュニティの場に図書館がどのようなになっていくのか。このような多様なニーズに応

えるだけではなくて、社会全体の変化や課題解決に寄与する図書館が求められているようです。

とは言いつつ、図書館の私たちは何のプロフェッショナルかと言ったら、情報のプロフェッショナルですので、情報のプロフェッショナルとしてトレンドは押さえつつ、「流されてはいけないぞ」と思うこともあります。ニーズは一緒だと思うのです。人間社会で人間が困っている事は昔から変わっていたり、変わっていなかったり。例えば健康面をどうしようとか、家の経済面が苦しいからどうしようとか、あとは、まさに医療支援じゃないですけど、病気になってしまってどうしようとか。私たちは新しい技術に惑わされがちではあるのですが、実はそれはツールが変わっているということで、人の抱えるニーズとか思いというのは一緒なのではないかと思っています。そのため新しいものをキャッチアップしつつ、「1 番大切なことは“まず誰？”」と問う。その「誰」がどのような課題を抱えていて、どのような悩みがあってそのツールを使って情報を得ているのだろうか、と考える。皆さんそのツールを使いたくて使っているわけではなくて、学びたくて使っているはずなので、学びたいと思った源泉やモチベーションは何だろうかということを大切にしていきたいと思っています。逆に図書館はそれを昔からやっていた組織・拠点なので、そこは堂々と胸を張っていつていただければと思います。

コロナやデジタル化など、様々な社会情勢を受けての図書館ということで変わったことと変わらないこと、2つあると思います。IT 技術も新しい技術も手段なんですよ。私たちはどうしても手段に踊らされがちですけども、大切なのは一番の基盤の部分なのかなと思います。皆さんの日々の業務の足元の部分を本当に大切にしていきたい

なと思います。ですから、図書館の存在意義は変わらないはずで。これは、図書館法の第2条の目的でもあるのですが「なぜ一般公衆の利用に供することなのか」や、その先にある、資料を渡すことで実現したい未来や社会があって図書館ができてはいるはずなので、ここはぶれないようにしたいと思っています。なので、IT技術でこんなプログラミングができてとか、こんなアプリを入れたら良いですよという話もできなくはないのですが、そこではなく、もう少し足元を固めようよというところを提案させていただきます。

元々の「図書館」はラテン語から来ていて木の皮とか、いわゆる資料を保管する場所としての「*librarium*」が起源らしいですけど、これはなんという意味かというと「本の置き場」ではなく、「魂の治療所」とか「魂の薬局」とかそういう意味だそうです。図書館というのは、ただ本を読む場所ではなくて、学ぶことで魂が喜び、生きがいを感じるという意味があるそうです。心の病のリラックス効果や2015年の鎌倉市図書館の取組のように「2学期を迎えて学校に行くことがつらい子は図書館にいらっしやい」というような図書館の呼びかけもまた図書館が魂の休憩所になるのかなと思いますが、元々の魂の治療所というのは、人間は学ぶことや知識を得ることによって前向きになれたり、成長を感じられたり、これからより良く生きていこうという後押しをする施設というのがギリシャ語の図書館の語源として言われてきたことだということです。これは、私の話の後半にも掛かることなのですが、変わらないものも変わるものもありつつ、でもなぜ図書館って存在するのかということを言葉にしていく時代がそろそろ来ているということを提起していきたいなと思っております。

「図書館は知識と情報を通じてすべての人に持続可能な未来を」とIFLAが発信しています。つまり、図書館は本を届ける、資料を残し、活用するもので、図書館にある情報を使って未来を創っていく拠点であるということを言っています。あくまでも、デジタルを使って未来を創るのではなく、それは知識と情報を得るための手段だということ。ただ、若い人がデジタルのほうを使い慣れているなとなった時は、そのニーズに合わせてどの手段を活用していくかを考える、この順番が大切だと思います。デジタルありきではなく、こういう未来を作りたい、そのためにはこういう情報をこの人に届けたい、届けるこの人が1番情報にアクセスしやすい手段は何かということです。でも、図書館だけではできないと思うんですよ。図書館がすべてのデジタルを揃えて行うことが難しければ、まさに今回のテーマである地域との協働を行いながら、図書館が持っていないツールをお互い共同で使うとか。ツールを持っても生かす方法が分からないかもしれない場合は情報のプロフェッショナルの図書館と一緒にあって最適な情報を届けていければ良いと思います。そのため、図書館はその定義を変えるのではなく、外的環境が変わっていくのに合わせ、手段・目的を踏まえた上で役割・手段などを変える必要が出てくるのだらうなと思います。

余談ですが、今能登半島にやっと電気が通って、本当に大変で……。私は、移動図書館のようなブックカフェの活動を石川県の能登半島の一番北側にある珠洲市で行っているのですが、珠洲市も、隣の輪島市も国道が通じていなくて、電気もまだ入ったり入らなかったりで、珠洲市の仮設住宅もやっと9ヶ月かかって9月末に入居ができるぞとなったら、9月21日に地震で地盤が緩んだ山に

豪雨が来て土砂崩れが起きて、崖の泥が浄水槽に入ってしまった水が出なくて、結局11、12か月避難所にいてやっと先月仮設住宅に入ったというようなこともありました。デジタル化社会だからデジタル化一本でと言っても、こういった電気が通じなくなる等の環境によってデジタル化が全部否定されてしまうこともあるので、それはツールであり、結局図書館は情報の匠として、どの情報をこういう環境下ではこう届ける、こういうデジタル環境下ではこう届ける、でもデバイスが揃っていない、且つ急ぎであればどこと協働していくかとそういう考え方の順番でいきたいなと常に私も思っております。

【—図書館は未来の投資につながりますか？—】

地域基盤としての図書館の役割の言い方・考え方の再考が最近求められるなあと思うことが増えています。例えば、「図書館は未来への投資につながりますか？」と聞かれたら皆さん何と答えますか。「図書館は未来で何を実現したいのですか？」や「図書館は未来の投資につながっていますか？」と聞かれたらどう答えますか？ 怖いですね。でも、なんとなく最近この言葉を考えていく必要性を感じています。昨日も博物館の仕事をしたときに「結局、博物館は昔使われたものとか書かれたものを置いているだけでしょ、博物館じゃなくても良いじゃない？」みたいな議論がある中で、博物館も未来につながっているよと言うのですけど、どこが未来につながっているのですかということをやちゃんと言葉にしましょうということを講演で話しておりました。もちろん、図書館の定義は大切にしつつ、これから作り出す未来に向けて何を実現していくか、そのために IT ツールも含めてどうやって使っていくかが重要なと思って

います。公共図書館の場合は資金調達とかファンドレイジングはあるようなないような、とは言いつつ、予算を通すためにはいろいろな人にお話しないといけないのですが、私はファンドレイザー、という資金調達の仕事もしているので意識しています。例えば、資金調達の調査研究をしている日本ファンドレイジング協会という組織が寄付の研究・調査結果を掲載した寄付白書を5年に1回出しています。2021年の『寄付白書』に寄付についての考え方のページがありました。何がモチベーションとなってお金を出すのかというアンケートでした。これ、一番上が「寄付者の名前が公表されるほうが寄付しがいがある」。つまり、神社やお祭りでよくある、「〇〇様御寄付ありがとうございます」というような「寄付者の名前が公表されるほうが寄付しがいがある」と思うと答えたのが5.5パーセント、「どちらかといえばそう思う」が20.4パーセント。「寄付したお金がきちんと活動のために使われているか不安に思う」が一番多くて36.3パーセント。寄付したお金が違うところに使われているのは嫌なので、寄付したお金がちゃんと活動に使われていると分かる信頼のおける団体に出したいと思う方々ですね。「どちらかといえばそう思う」が40.9パーセント。ここで注目すべきは、「寄付は未来社会への投資だと思う」です。寄付は、一過性の活動のため、例えば博物館だったらこのコレクションを購入するのでお金が必要で、ということもあるようですが、それが未来社会にどうつながるのかということをしちゃんとメッセージ化している団体に寄付をしたかという問いに「そう思う」と答えたのが8.1パーセント、「どちらかといえばそう思う」が43.6パーセントですので約5割の人がその活動にお金を出すというよりも、その活動が生み出す

未来の夢を一緒に見たいからお金を出すという人が最近増えています。最近では未来を考えることがきつい時代になっているとか、インフレもすごいし、大変な世の中になると、どこかで皆未来を描きたい、未来のメッセージを発してくれるところで夢を皆で見たい、というのがあるようです。寄付は未来社会への投資だと考えている人が多い傾向にあります。これだけを見ると、夢物語を語れば良いのかとなりますが、最近、行政の評価とか計画の中でも急にアウトカム（成果目標）は何だと聞かれることがちらちらと出てきているのではないかと思います。ちょうど今、文化庁の去年の補正予算の資料を見ていたのですが、ちゃんと予算の活動があってアウトカム、インパクトと書いてあって、このお金はどういう社会的インパクトや未来の実現をしたくてこの活動をしているかということがロジックモデルとして作られている。実は寄付者（お金を出す人）もそうだし、計画策定等においてもロジックモデル、いわゆる活動の先を言葉にしてくださいね、ということが増えているのかなと思っています。四国の自治体の新しい図書館の読書推進計画を見た時も、新しい計画がまさにインパクト、アウトカム、成果、そして「だからこの活動をやっています」、「この資料を作っています」、「この展示やっています」という書き方になっていたのが、アウトカムを語る傾向が、がちらちら増えているのかなと思っています。これが最近の傾向ではありますが、うちの自治体は求められていないよ、というところもあるかと思っています。が、今から準備されていたほうが良いかなというのは、「何をやるか」ではなく「なぜそれをやるか」ということを知りたがられる傾向が増えてきているためだと思っています。私もNPO にいたので分かるのですが、今までは活動

のことをPRして、そのために予算を要求していたんですよね。例えば移動図書館をしていた時は、遠野市に事務所を置いて陸前高田市や大船渡市に通っていたので、移動図書館に1回出するのにガソリン代も含めて約10万円かかったんですよ。「移動図書館やりたいです、3人のスタッフが必要です、10万円必要です」といういわゆる「モノ、ヒト、カネ」のインプット（投入）が必要だから予算が必要という活動ベースで話をしておりました。繰り返しになりますが、最近の傾向は、活動ではなく何をやるかが問われています。「移動図書館に行って何をしたいの？」ということ言葉をしていかなければならないなと思いながら、言葉を見つけるようにしています。これは、市民参画にも通じてくる場所ですので頭の片隅に置いていただきたいです。寄付をしてくださる方が知りたいのは、未来への投資かどうかということでしたが、寄付に限らず対価が生まれない場合でも、何を生み出したいかという部分だったりするので話題提供しました。

それから、私たちは、今までアクティビティとアウトプットというのは活動がもたらす直接の結果で語ることができたんですよ。活動がもたらす直接の結果というのは、例えば図書館が貸出サービスを行っているという「活動」の「アウトプット（直接の結果）」は1年間に何冊の本が借りられました、何人の人が利用しました、予約は何件入りましたなどです。展示会を行った際の月の集客が200人でしたなどと報告を行っていました。ただ、これを軸にすると少し大変で、例えばコロナになって入館者がゼロになったら評価はゼロと測られてしまう。コロナなどで利用者がゼロになったとしても、図書館は、図書館でオンラインで調べ物をしながら何かしらの社会への影響を及

ぼしていたとしたら、その部分をしっかりうたわないと数字だけでは正しく評価されないということもあるかもしれないです。「図書館は未来への投資になりますか？」と聞かれたら、しっかりとこの「その活動が何を生み出すのか」という部分を語れるようにならなければいけないと思っています。利用者と貸出数だけだと何かあった時にダメな評価を受けるとなったら図書館としては「そんなことないぞ」ということになる。だから、この辺は押さえておきたいところです。

【アウトプットとアウトカムを考える】

そのためにも、図書館で行っている活動が何を目標として行われているのかということを考えていかなければいけないのですが、ここで大事なのはやはり人なんです。図書館軸で考えると、生み出したいアウトカムは図書館の変化や図書館の発展というよりは、図書館を利用した人がどう変わるか、何を生み出したいかということだと思いますのでそこをしっかりと押さえていただきたいです。あとはアウトプット（活動目標）とアウトカム（成果目標・価値）を分ける。例えば、貸出しを行うことが活動で、アウトプット（活動目標）は結局貸出数や利用者数になるかもしれませんが、「貸し出す」という行為は何を実現したくて行っているのかというアウトカム（成果目標）の部分を言語化したいなと思っております。日本の図書館でも貸出数が多いと評価が高いということに捕らわれて、貸出冊数を水増ししてニュースになった図書館がありました。でも、貸出冊数を多く出さないと図書館は評価されないということって悲しいことですし、そういう時代ではなくなってほしいなと思うんです。少子高齢化で人口が減って予算も減らされていくかもしれない中で、図書館の価値

がなくなるのかということそうでもないですよ。

「なぜ図書館は残り続けなければいけないのか」、「それは未来につながっているから」、「どう未来につながっているのか」という大きいピクチャを描く前に、まず行っている活動一つ一つが何を生み出しているのかということを言葉にしつつ、それがまた、地域とどう結びついて実になっているのかということが問われる時代になってきていると思いますので、だからこそこれを考えていっていただきたいと思います。考えるときに、地域の方を集めてワークショップをやります、や、パブリックコメントをやります、などもあると思いますが、あまり回答が来ない場合もあるかもしれないので、図書館の日々の業務のアンケート箱など、もう少しカジュアルに、「この活動でどんな変化がありましたか」とか「この活動参加してどうでしたか」など住民の声を聞くことや有識者に意見を伺うことで何を生み出したいのかを考えていきたいなと思います。その上で、どのツールを使うかということ、ツールありきではなく、こういうことを生み出すために最適な形がこうだと説明がつけば案外ロジックにつながっていくと思うんですよ。それこそ「オンライン学習を図書館でやりたいです」、「オンラインの時代です」と言ってもオンラインで学習するというのは何かのツールが必要ですし、まずオンラインがツールですからね。学習するのであればもしかしたら図書館にある本を使って自習室で行っても良いわけなので。投入というのがモノ・ヒト・カネで、それを使って行のが活動です。活動が生み出す直接の結果がアウトプットと呼ばれていて、その活動がもたらす変化がアウトカム、インパクトが社会への影響です。デジタル化を進めていただくことはもちろん良いですが、この考え方の一貫性がないと、「オン

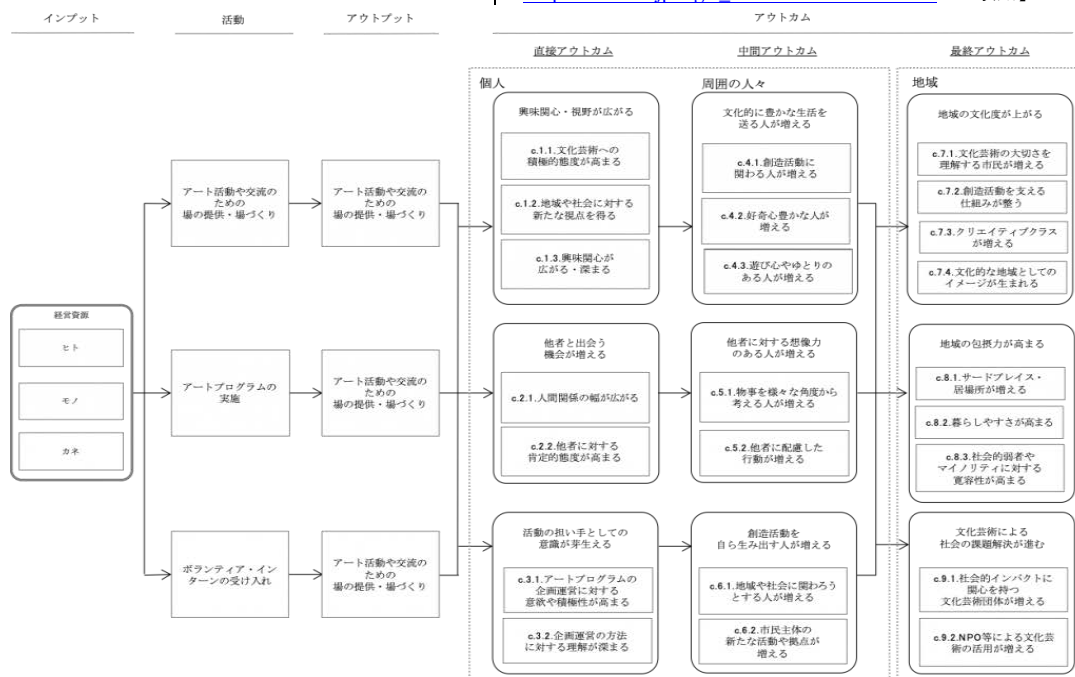
ライン学習です」と言っても手前の部分で議論してもなかなか通らないと感じます。もしかすると市民や上の方はこっちのアウトカムを見たがっている可能性はありますね。

最近の NPO の助成金の応募でも、今までは活動を記入して予算を記入すれば通っていたものが、活動ではなく、成果目標という社会に何を生み出したいかが問われている時代になっていると思います。ぜひ、活動、アウトプットとアウトカムを押さえていただきたいと思います。繰り返しますが、この活動は何を生み出すのだろうということとアウトカムを考えるヒントは常になぜを問う、日々の業務でなぜ私はこれをやっているかという私軸で考えて良いと思うんですよ。担当者同士話をしてみて初心に帰るということが大切だと思います。ロジックモデルの中に、「インパクトマネジメント・イニシアティブ」というものがあって、これを検索していただくと芸術文化分野におけるロジックモデルの例で、どうやって書いているのかの例が出ていますので見ていただければと思います。

ちなみに表では、左側にヒト・モノ・カネがあり、活動としてアートプログラムの実施があってアートプログラムが結局何を生み出そうとしているかがロジックで描かれていますので、こういうものを見ながら皆で整理整頓していければいいなと思っております。2年前に日本に面白いファンドが入って来ました。アウトカムファンド forIMM という助成金で、1 件につき年間一千万の助成が下りるプログラムで、1 つの組織で3年使えるというファンドです。アウトカムファンド forIMM は外国から入ってきた新しい助成金プログラムで、何で審査をするかという活動ではなく何を生み出したいか、そのためにそれは測られなければいけないので、「どの指標で達成したか」「していないか」というロジックモデルを基本的なベースとしていて、「どの活動をするか」をほとんど参考にしません。

【SIMI 社会的インパクト・マネジメント・イニシアティブ

https://simi.or.jp/logic_model/culture-and-art より引用】



毎月助成金を受けた団体とは、いかに成果目標が出たかどうかを測っていくかという話し合いをしています。このファンドの面白いところが支出根拠の領収書の提出を必要としないんですよ。ただ、アンケート結果などのアウトカムが生み出された証拠を見せてOKが出たら振り込まれますし、一千万円は人件費に100パーセント使おうがレンタル料や交際費に使おうが何に使おうが構わないんですよ。私はこのファンドのコンサルに入っていて、助成金を取ったところとやり取りをしているんですが、お金を出すとある財団が生み出したんです。少し活動をしてみて、こっちの活動の方がもっと良い結果が出てもっと人が楽しんでくれると思っても、助成金の申請書を出して通ってしまったら活動変更しづらいですよ。こっちの活動の方が成果が出ると思っても、最初の助成金を通ったほうの計画を嫌々でもやらなければいけないとなると社会に良くないよね、ということで、「これを実現したい」ということがあったとして途中で最適な活動の形やツールが変わってもそれに使えば良い、ただその実現したい未来は目指してほしい、というファンドになっています。最近ではトヨタ財団や日本財団も申請書にこのような形を求めるようになってきたなと思っているので片隅においていただきたいです。

資料に文科省の読書推進事業の概算要求のポイントの資料を載せていますが、一番下にアウトプット・短期・長期アウトカムなどが書かれています。この言葉を書く時代が来たんだなと思って見ておりました。

【社会変化に伴う利用者ニーズの理解】

最後になりますが、社会変化に伴う利用者ニーズの理解ということで、図書館が掲げたアウトカ

ムは利用者ニーズに合致しているかということがとても重要です。やはり、どういう社会を作りたいか、社会は人で構成されているので、人が何に困っていてビフォーアフターでどう変わっていくのか、この情報を得られることで、例えば、病気の支援でしたら、早期発見につながってとか、御家族を亡くした方ですと、御病気を患っている方のご家族のコーナーがあって痛みを、本や本を書いた人を通して分かち合おうということがありますが、そういう人があって活動やモノがあると思います。ですから私は、ニーズの把握がすごく大切だなと思います。

ニーズの把握もマクロの視点とミクロの視点があって、マクロは社会や地域全体の動向を把握すること、ミクロは個別の利用者や特定のコミュニティに焦点を当てることかなと思っています。ニーズ把握には、政府の統計とか、自治体の特徴がある困りごともあると思うので総合計画ですか自治体の調査・計画の数字などを押さえておきたいところです。また、教育大綱ですとか教育基本計画などを見ると、教育に関わる課題などが出ていますので、私はそれを見るようにしています。例えば、子供の病気でしたら、がんの子供を持つ保護者の方のNPOだったり、こども食堂だったり。最近はこども食堂の数が公立中学校の数を超えたとニュースになっていましたけれども、こども食堂と言ってもいろいろなんですよ。私はイメージで最初は貧困の子供がご飯を食べられなくて来ることがあるのがこども食堂と思いきや、こども食堂によっても実現したい社会というものが結構違って、子どもの貧困に関わるものもあれば、世代間を超えた交流もあって、子どもだけでなくおじいちゃんおばあちゃんまで来てもらって高齢者の孤立を防ぎながら子どもも含め家族で

はない第三の近所づきあいを生み出したり、食事だけでなく学習塾など就労支援のようなものを行っていたりします。こども食堂というとみんな同じ意味のこども食堂と見えるのですが、だからこそアウトカム、何をを目指したいかが特徴というところで作られています。そうでないと、寄付を集めるときにみんな同じだと、隣の町のこども食堂もあるからいいやと寄付者が離れていってしまうかもしれないので、目指したい社会を声にしていうというお話をしておりました。図書館も同じで、みんな一緒というわけではなくて地域のコレクションだったり力を入れていること、地域の課題に向き合うということはそれぞれ違うと思うのでしっかりとやっていきたいところです。

ミクロとしては図書館が取っている統計とか利用者アンケート、ヒアリングなんかをやっていたきたいなと思います。この前社会福祉協議会の5年に1回出す計画を作った時に、力を入れて2年間くらいかけてワークショップを行ったりデジタルを使いながら住民と話し合ったりされました。今までだとそろそろ5年経つかという時期に前の計画を持ち出してとりあえずコピペして数字だけ変えていたけれど、今は地域住民の声を聞いて行わなければならないということで実践されているようです。

近年の社会傾向ってどうやって調べるかと思ったら、やはり私も図書館で調べているんですよね。関わる地域の図書館で白書を読んだり市の計画や地域資料を読んだりしていますし、ネットでも調べています。逆に、図書館は地域の問題を把握するネタは絶対持っているはずですし、足元に地域を知るデータは転がっていると思うので、まずはそこから拾ってみて、何を必要としているかを押さえていきたいところです。

あとは、社会変化に伴うサービスの多角化というところで、図書館が全部やるのかといったやはり難しい。いち NPO でも難しいです。近年の日本の課題は図書館だけが解決できるかと言ったらもちろんそうではなくて、少子高齢化、経済格差、労働力不足と働き方改革の遅れ、気候変動と環境問題、テクノロジーの進展とデジタル格差、国際競争力の低下などがある中で、この次に続く部分で、いかに協働とか自分たちの部署以外にも含めて地域にどう開いていくかということかなと思います。自治体・学校・NPO・NGO・商工会議所・医療関係・芸術文化団体・メディアの方とかこういうところを巻き込みながら行ってきたいなと思っております。図書館が他の組織と協働する意義は、医療支援だといって棚を作って提供するとき、やはり医者ではないのでリアルな声をくみ取れるよう医療機関と一緒にいうといったように、サービスの幅と質の向上、地域社会への貢献、図書館が地域課題解決のハブとして機能したり、持続可能な運営、資源や情報を共有し、効率的な運営を実現したりとかそういうことではないかと思っています。東京都の多摩地区にあるパルテノン多摩という複合施設の例なのですが、定期的に航空写真を撮って昔と比較していく小冊子を記録として出しているんですよ。多摩地区は70年ほど前から現在もニュータウン作りを行っているんですが、それを定点観測しているんです。それを小冊子として出したいのだけれども先立つものがないということで寄付集めを行いまして、目標金額150万円くらいのところ300万円くらい集まったということがあります。パルテノン多摩も学芸員さんや司書の方でお金集めが得意という方がおらず、どうしたら良いかという時にその施設の友の会と言いますかメンバーシップをされてい

る方とか、ふっと目を向けると地元の大学の方やボランティアでパルテノン多摩に来てくれる方に、営業の仕方を含むアイデア出しなどの話をして、その方たちの資源や情報を共有してお金を集めて達成したということがあるんです。私は NGO・NPO にいますが、名前の知らない方にエファジャパンと言っても「誰それ？大丈夫ですか？」と言われますけど、図書館の場合は図書館と言うだけで最高の信頼を得られる一般名詞のようなものなので、そうやって資源や情報を共有して市民を巻き込んでいくことで効率的な運営を達成できるのではないかなと思っています。ただ人を集めるために何が必要かと言うと、やっぱり目指している未来への投資、こういうものを実現したいからみんなで一緒に夢に向かって走りましょうというような大きなメッセージが必要になってきます。これは、もちろん市民参画だけではなくて、もしかしたら今後、計画策定等々の時にアウトカムはなんだと聞かれる時代が来るかもしれませんので、心してやっていただきたいです。まさにアウトカム、目指す方向を決めるのは、きらんと光る一番星でその言葉が決まればみんなで進んでいけることになる。何をやるかではなくなぜやるかを問う。デジタル社会の中でなぜやるか、そのためにこの活動が必要で、そのためにこういうツールが必要で、このツールがなければこの夢が達成できませんというようなロジックの流れで説明しなければいけないことが今後増えてくるのではないかと考えます。話題提供と次につながる地域協働の実践というお話がこの後ありますので、事例発表される皆さんがどのように一番星をきらんと輝かせたかも含めて私もお話を聞くのを楽しみにしております。

話題提供のような形になってはしまったのです

が、「図書館は未来の投資につながりますか？」と問われた時に胸を張って言葉にできることを願っております。御清聴ありがとうございました。



事例発表

「地域の懸け橋としての図書館」

一戸町立図書館

主任司書 畠山美幸 氏



一戸町立図書館の畠山です。「地域の懸け橋としての図書館」一戸町立図書館地域おこし事業10年間のあゆみの事例発表を行います。

簡単に自己紹介いたします。私は図書館で勤務して19年目になりました。主に児童・YAを担当しています。今回、このような貴重な機会を頂きまして、ありがとうございます。当館の事業についてお話ししていきたいと思います。

一戸町の紹介をします。岩手県内陸北部に位置する一戸町は、豊かな自然に恵まれ、農林畜産業やものづくり産業が盛んな町です。

人口は10,692人。3年前には、一戸町の御所野遺跡（ごしょのいせき）が「北海道・北東北の縄文遺跡群」構成資産の一つとして世界遺産に登録されました。

当館の紹介をします。2002年7月16日に開館し、今年で22年目になります。ドーム型のホールが目印のコミュニティセンターと、図書館の複合施設になります。

蔵書数は、約9万冊所蔵。図書費は、約534万円9千円。年間来館者は、およそ5万6千人。図書館職員数は、館長含め8名。うち司書が4名です。平成26年から指定管理者制度導入。いち

のへ文化・芸術NPOが運営しています。

当館の地域おこし事業とは何か説明していきます。地域おこし事業は町から業務委託されている事業です。2008年から地域おこし事業図書館お正月まつりで、地域の方を招いて、凧つくり・竹とんぼ等を実施していましたが、「お正月まつりだけの地域おこし事業でいいのか。」と考えるようになり、さらにステップアップし、本格化しようと動き出しました。

2014年から地域の人材を活用しながら、地域の活性化と世代間の交流を図ることを目的に実施していきました。

しかし、「地域の人を活用しながら」と、事業目的に掲げていましたが、「どんな内容がいいのか」

「どのように講師を依頼すればいいのか」「図書館で出来ることって限られているんじゃないか」と、考えていました。

考えているだけではなく、行動してみようと思い立ち、まずは町の企業・商業施設や人を知ろうと、町のイベントに進んで参加してみました。休みの日は、いくつものイベントをはしごしながら、参加しました。

参加するうちに、もともと、一戸町出身ではなかった私は、どんどんもっと一戸町について知りたいと思うようになりました。

イベントに参加して、このイベントのワークショップを図書館でできないかなと打診していきました。

しかし「なに？図書館？」「なんでわざわざ図書館で事業をしないといけないのか」「図書館で何ができるのか」と言われました。

まず、自分を知ってもらうために何度も足を運びました。イベントだけではなく、企業の事務所などに行きました。「この作品について話してみま

せんか？図書館で一緒に作ってみませんか？」と一緒に事業をしたいと熱い想いを伝え続けました。

段々に、「んじゃ、1回やってみるか」と事業をしていただけるようになりました。

記念すべき地域おこし事業の第1回目は平成27年度に開催した「絵本 de クッキング～絵本にでてくるお菓子をつくろう」です。保健センターの栄養士と、食生活改善推進員の方と一緒に事業を行いました。

どんな風に事業を進めて行ったらいいか、目に見えなかったため、予行練習をしました。本番さながらに職員の子どもを集めて練習しました。その成果もあって、本番も盛況に終えることができました。

参加者から「絵本に出てきたドーナツを親子で作ることができた」、「また開催してほしい」などの感想がありました。

しかし、事業をすることでいっぱいいっぱいでは余裕がなく、アンケートなど事後報告が疎かでした。

徐々に「地域おこし事業を一緒にしませんか？」と、声をかけてたくさんの町の企業や商業施設と事業を実施しました。

竹細工教室、縄文出前講座、おこめ教室、切り絵教室、出前酪農講座、手芸教室等、これまで約30種類を開催しました。

はじめ、図書館との事業を渋っていた方々やレジェンドの大ベテランが、「また図書館と一緒に事業をやりたい」、「今度いつ何をやろうか」と話しかけてくれたことが何より嬉しかったです。

また、10年間いつも参加してくれている方や、新たに事業を通して、図書館を知ってくれる方等が講師と参加する人の出会う場にもなりました。

写真は事業の様子です。詳しい内容は当館の

ホームページに報告しています。また、今回配布の「一戸町立図書館地域おこし事業のあゆみ」もあります。そちらをご覧くださいと思います。

地域おこし事業を開催していく中で、コロナ禍になり事業を自粛することがありました。そんな中で知り合いの医者のご夫婦に「コロナ禍で医療従事者の皆さんに感謝している。医療従事者の仕事を知りたい。」と思いを伝えました。

すると、「ちょうど医師の仕事を伝えていきたいと夫婦で話していた。ぜひ、やりましょう。」と、令和4年度に「お仕事体験小野寺先生のドクターラボ」を開催しました。「縫合体験、超音波体験」など体験ブースが参加者から大好評でした。新聞紙に掲載され、多くの方から「自分の住んでいる町でこんな仕事の体験ができるのはすごい嬉しかった。」「いい事業だから続けてほしい。」と声をかけてもらいました。

令和5年度には、今までお世話になった講師の皆さんと、地域の皆さんに感謝の気持ちを込めて、地域おこし事業感謝祭を開催しました。

講師で招いた方々のブースの紹介や販売・体験をしました。スタンプラリーでは地元の高校生徒会もお手伝いしてもらいました。図書館はおはなし会、コミュニティセンターはミニお化け屋敷を実施しました。160名の方が来場し賑やかなイベントとなりました。

お仕事体験をまた開催してほしいと、声が多く聞かれるようになりました。地域にどんな仕事があるのか親子を中心に、一般の方も求めている事業なんだと改めて感じました。

そして、令和5年度にはアンケートで多かった「警察官のお仕事」を開催しました。当日は、警察官16名、総勢95名で、「指紋採取、白バイ走行」など実施しました。

今年度はこちらもアンケートで多かった「消防士のお仕事」を開催しました。消防士14名、総勢75名で、「煙体験、放水体験」など実施しました。煙体験の様子を動画をご覧ください。

【動画再生】

このように、いつもお仕事体験では、4つか5つの体験ブースを設けています。

地域おこし事業お仕事体験を3年間実施し、講師が参加者に仕事を伝える姿がとても輝いている、そして仕事に誇りを持っていると感じました。

その一生懸命な姿が参加者の皆さんにも伝わり、体験ブースは皆さん真剣そのものです。「これからも続けていきたい」と思える事業に進化しています。

まとめとして、地域おこし事業が、町民と地域の企業・人を繋ぎ合わせる懸け橋の役割が図書館であり続けたい。そして、講師や参加者に成長させてもらっている事業でもあると10年間の事業を実施して感じました。

さらに事業だけではなく、図書館で町の情報発信をするべく「いちのへ×しごと展」と題して展示を展開しました。写真が展示の様子です。企業の紹介パネルは役場から借用しました。実物の商品などは直接企業に交渉して貸していただきました。

館内の展示は多くの一般の方が足をとめて見ていました。「次回は帰省してくる方に向けてお盆時期に展示してはどうか」との声がありました。

今年度で地域おこし事業は10年目を迎えました。記念企画として、町内在住の食の匠を講師に絵本 de クッキングを2月に実施します。

来年度以降も地域おこし事業を通して、今までお世話になった講師の方と新たな講師の発掘をしながら、町民と地域の企業・人の懸け橋として図

書館が役割を果たしていければと考えています。

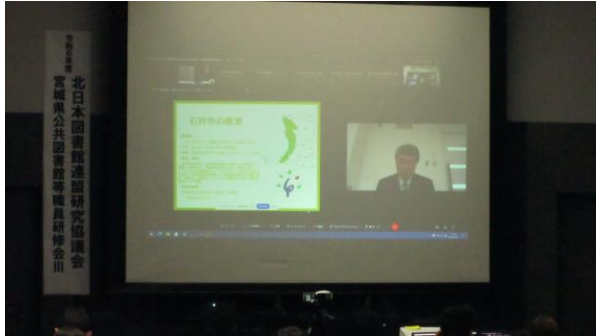
これで一戸町立図書館の事例発表を終わります。
ご清聴いただきましてありがとうございました。

事例発表（オンライン）

「地域とつながる図書館」

石狩市民図書館

司書 工藤直揮 氏



ただいま紹介いただきました、石狩市民図書館司書の工藤と申します。今回は大都市札幌市の隣に位置する石狩市の場合ということで簡単にお話させていただきます。よろしくお願いします。

簡単に石狩市の紹介をさせていただきます。石狩市は平成8年（1996年）に市制施行となりまして、旧来より札幌市の北側に位置する特性のため、同市のベッドタウンとして発展してきた自治体です。平成17年（2005年）には隣接する厚田村・浜益村と市町村合併を行い、さらに北に伸びた縦に長い街になっています。

石狩市と言えば以上のようなキーワードが出てくると思います。鮭（石狩鍋）、石狩湾新港、俳句のまち、灯台（北海道で現存する最古の灯台で、1957年の木下恵介監督の「喜びも悲しみも幾歳月」の舞台にもなりました。）、全国において市で初の手話条例を制定したまち、厚田4偉人（子母澤寛、吉葉山潤之助、戸田城聖、佐藤尾松太郎）、ライジングサン・ロックフェスティバル等を開催しております。この中では石狩鍋が有名ではないかと思いますが、近年では日本4大ロックフェスティバルの1つと呼ばれるライジングサン・ロックフェスティバルの開催地として全国的に知名度

が高くなってきている所ではないかと思います。今年度につきましては、菅田将暉さん、スピッツさん、泉谷しげるさんといった方々が公演されたようです。

石狩市民図書館の概要です。中規模くらいで、市の直営館となっております。北海道は近年、自治体の直営館がほとんどなくなってきておりますが、石狩市は直営で運営を行っております。

石狩市民図書館の特徴です。特に資料の貸出数に制限を設けておらず、貸出利用者登録は市外の方はもちろん、全国どこにお住まいの方でも登録することができます。このような図書館はあまりないのではないかと思います。これに加えて、札幌市の北区と手稲区に隣接しているという位置関係により、現在では、市内と市外の利用者が大体半々くらいになっている状況です。資料貸出数も北海道内で上位になるのではないかと思います。

今回の事例発表の課題となっている図書館と地域他機関とのつながりについて説明したいと思います。

図書館とつながりのある地域他機関としてはこのように市役所や他の公的機関、学校やNPO団体、企業等が挙げられます。

個々の事例について紹介していきます。選挙権年齢が18歳に下がったときに選挙管理委員会と連携して作成した特殊展示コーナーの写真です。

こちらは石狩市の保健福祉担当と連携し、笑いに関する図書を展示し、「道民笑いの日」というものをPRしたときの写真です。こちらは石狩市の観光課と連携して、昔、大阪と蝦夷地を行き来していた商船の「北前船」が日本遺産認定を受けた際に、その内容に関する図書を展示して「北前船」をPRした企画の写真です。

このように、市役所の他部署と連携しながら利

用者の生涯学習支援や情報提供を行っております。当館は市直営の図書館という施設の性格上、市の当局とは展示という形で協力を行うことが多いです。また、行政支援という形ではこういった展示以外にも、資料入手の支援やデータベース等を使った情報提供を行っています。

一方で展示とは別の形の連携も行っております。石狩市では当市の自然や文化、歴史や芸術、その他の分野を広く後世に広めることを目的として、「石狩叢書」というシリーズの本をこれまで3巻発行しています。図書館は、発刊編集委員会の事務局とし、市民や学識経験者を中心とした叢書発刊編集委員会とともに刊行作業に携わっております。毎回のテーマに合わせて、各委員のネットワークを随時活かしながら専門家と連携し、執筆を依頼することも行っております。

市役所とは別の公的機関との連携の例として、こちらを説明いたします。石狩消防署と連携した防災PRの特集コーナーの写真となっております。この時は防災グッズを実際にお借りして本と一緒に展示を行いました。防災の消火器やその手のグッズ等を展示させていただきました。

この他の公的機関との連携につきましては市内の藤女子大学花川キャンパスを始めとした大学や、石狩商工会議所との街ゼミ等で協力を行っております。

こちらはNPO団体とのつながりの1例です。市内のNPO法人「ひとまちつなぎ石狩」は花川北コミュニティセンターにある石狩市市民活動情報センターを運営しており、業務の一環として市民図書館の予約本の受け渡し、返却を委託して行っており、また、年に1度開催している古本市（写真はブックマーチ）の開催・運営には図書館も協力しています。こちらは

コロナ禍以降、中止となっていましたが来年度復活する予定となっております。本の値付けや収集が大変ですが、図書館としてもご協力をさせていただいている所です。

企業とのつながりとの1例をご説明します。こちらは、当館の除籍本を石狩市内の全郵便局（14箇所）で自由に利用していただく企画となっております。

平成29年に石狩市と石狩市内郵便局との包括的連携に関する協定が結ばれました。その一環として市民の方々にも、もっと気軽に本を手にとってもらうことを目的にこの事業を始めました。本は市民図書館の除籍本を活用しております。

市内の中央郵便局の方が大変理解のある方で、当初は図書館の近くの一部の郵便局のみで試験的に実施する予定でしたが、結果として最初から市内全ての郵便局で本コーナーを設置してもらうことになり、大変感謝しております。

郵便局は地域に根差したネットワークを活用するのに最適な施設となります。実際にこの事業をきっかけに市内の高齢者施設や地域のカフェ等で除籍本を置き始めるといった更なるネットワークの広がりを構築できたところです。

最後に、市役所や他の公的機関、NPO団体、企業等が、一堂に会するイベントの実例として科学の祭典を紹介します。

「科学の祭典 in 石狩」と称して行っている、平成23年度（2021年度）より始まった事業です。

科学館や学校で開催するケースが多いイベントですが、石狩市では図書館が事務局となっており、少ない事例なのではないかと思えます。

こちらのイベントもコロナ禍で中止やインター

ネットのHP上のみで開催したこともあります、現在も毎年継続して開催しており、今年で14回目となりました。

こちらは、科学や実験に関するブースを個人や団体でそれぞれ開設していただき、実際に参加者が実験や体験をして、楽しむことができるという内容になっています。

主催は実行委員会形式になっており、この中に市役所を始めとした図書館の各部署、校長会や教頭会、市内高校や大学等の教育委機関の方々やユネスコ協会や教育支援会等のNPO法人の方々に参加していただいております。

各ブースについては、市役所関係やNPO団体、もしくは個人で参加していただいている方や電力会社、コンピュータ関係等の一般企業の方々が、毎年ではありませんが、参加していただいております。

例えば、「はたらく車」と題して、市内建設業者の除雪車や消防車のはしご車を展示していただいたこともあります。この写真は、実際に参加者の方にはしご車に乗っていただいて、上の結構高いところまで上がっていただいた写真です。当時はかなりの行列ができたのを覚えています。大変好評でした。

また、石狩湾新港内のデータセンターの見学ツアーを実施したこともあります。

この「科学の祭典 in 石狩」というイベントは、イベントの性格上、図書館を会場とすることや、図書館が事務局となって主体的に関わるということはいかなるものかという意見が当初から内部から上がっていました。ただ、図書館は社会教育施設としての役割があることと、結果的にですが、市内外の団体や個人といったところはかなり広くネットワークを広げることとなり、図書館の運営

にも大いにプラスになったと考えています。

こちらの写真からもかなり入場者がいるのがわかると思いますが、このように利用者の促進に大いに貢献しておりまして、コロナ禍の前は約1,500人の入場がありました。

近年は小規模になっており、今年度もまだ万全ではなく、図書館のみで行いましたが、それでも400人近くの入場がありました。石狩市民図書館としては図書館まつりと並ぶ大きなイベントとなっています。

なお、「科学の祭典 in 石狩」については参加者の傷害保健は市からの補助金、残りの運営資金は子どもゆめ基金の助成によって実施しているところです。

このように試行錯誤しながら、地域他機関と協力し活動を行っています。こういった地域とのつながりは、人脈やネットワークを広げることにつながり、必ず図書館の運営にプラスとなって返ってくるとこれまでの活動で強く感じています。

石狩市民図書館の事例発表は以上になります。ご清聴ありがとうございました。

事例発表

「行政情報を地域へ」

角田市図書館

副館長 加藤理江 氏



皆様、こんにちは。角田市図書館の加藤と申します。「行政情報を地域へ」と題して、小さな取り組みではございますが、紹介させていただきます。

はじめに角田市図書館の紹介をさせていただきます。

角田市は宮城県の南部に位置しており、人口約27,000人の自然豊かな小さな田園都市となっております。角田には「5つのめ」という地域ブランドがあります。本日配布の観光パンフレットにも「5つのめ」「こめ・まめ・うめ・ゆめ・ひめ」の説明がありますので後ほどご覧ください。

角田市図書館は市民センター「角田田園ホール」の複合施設となっております。敷地内に子ども図書館を併設しております。子ども図書館は親子で読み聞かせをしたり、親子で相談しながら本を読んだり、気兼ねなく過ごせる施設となっております。

当館の取り組み経過となります。経過として例年重点目標の一つに、地域の情報発信拠点としての取組や関係機関施設との連携を掲げていましたが、具体的な事業としては定着していませんでした。

この状況を打破するために、令和3年9月から毎月の特集とは別に各課のイベントや事業を応援

する連携事業として、ミニコーナーを図書館に設置しました。以降、毎月各課のイベントや事業に関するコーナーを設置しています。このコーナー設置後、部課長会議で各課連携ミニコーナーについて周知を行い、事業の情報提供依頼を行いました。

その後、大きな周知は行っていないですが、地道に連携コーナーを計画して設置しております。

これまでに、各課連携応援事業として設置したミニコーナーの件数は表のとおりとなっております。(令和3年度：20件、令和4年度：17件、令和5年度：23件、令和6年度(11月末現在)：17件)

当館はミニコーナー以外にも各課と連携事業を行っております。一例として、乳幼児検診会場に移動して図書館の絵本コーナーを設置し、絵本の紹介や図書館の利用案内を行っています。

各課連携コーナーへ込めた当館の思いとしては、市の施策や事業については、住民のために作られており、住民にとってメリットがあるものです。市の施策や事業について住民にもっと知って欲しいという思いがあります。

市ではたくさん計画を作りますが、なかなか市民の方には伝わっていない状況が続いていました。一方、当館としては図書館としての役割を踏まえ、情報拠点施設として市政情報を住民に届けたいと考えておりました。また、行政にも住民にも図書館をもっと活用して欲しいという思いもありました。図書館としての役割を踏まえ、本をとおして、行政と地域をつなげる取り組みが大事だと考えております。

連携コーナーを設置するにあたり、ポイントとして各課と図書館がwin-winの関係になることが重要だと考えています。ポスターやチラシ等と

もに、ミニコーナーとして設置することによって利用者の目に留まりやすく、より興味を持ってもらい、行政の PR にもなります。また、資料の貸出により、施策や事業への理解が図られます。図書館としても利用促進へとつながります。

当館が行っている事業の実施の流れを紹介します。

はじめに情報収集を行います。市のホームページや広報誌等で各課が行っている施策やイベントの状況を把握します。

次に、その情報を基に関係機関各課の方に図書館でミニコーナーを設置して良いかの打診をします。逆に各課の方から図書館へミニコーナーの設置について依頼が来ることもあります。

ここでのポイントですが、手続きの簡素化です。担当課の負担にならないように文書のやり取りは行っていません。図書館側でコーナー設置の起案を行います。各課へ打診する際に、図書館のコーナーについて周知してもらうように担当課に依頼します。その後各課連携ミニコーナーを設置します。

こちらの表につきましては令和3年度から令和5年度に設置した主な連携ミニコーナーの一覧です。主な部分を簡単に説明します。

1 番目はずんだまつりと連携した事業になります。こちらは角田の「5つのめ」【まめ】に関連した事業の応援コーナーになります。12 番目のはやぶさまつりは角田の「5つのめ」【ゆめ】に関連した応援事業になります。

この他にも角田市はゼロカーボンシティ宣言を行っており、市と連携したコーナーや、第6次長期総合実施計画シンポジウムを行った際に、連携コーナーを設置しています。今年度も実施しておりますが、消防団員募集も関連したコーナーを設

置しております。

コーナーは約1か月間設置して、毎月連携した事業を行っています。全部は紹介しきれないので No.3 と No.4、No.10 について説明します。

No.3 の観光 PR 動画についてです。こちらは市長が電動アシスト自転車に乗って、宇宙のまち角田市の魅力を伝える動画配信を行いました。それに合わせて連携コーナーを設置しました。

こちらは実際に設置したコーナーの写真です。観光 PR 動画の画面を印刷したものと実際にサイクリングで回った関連施設を紹介、サイクリングや宇宙に関連する資料、郷土資料館で発行している資料の展示を行いました。

No.4 の成人式についてです。こちらは例年、新成人へのおすすめの本のリーフレットを毎年配布しておりましたが、令和3年度（令和4年）の成人式から成人式会場に図書館のコーナーを設置させていただきました。このコーナー作成にあたり、成人式実行委員会におすすめの本を推薦してもらい、紹介分と併せて本を展示しています。

成人式の前後は図書館でミニコーナーを設置しております。

次に No.10 のおはなし給食についてです。給食センターとは令和3年度にも食育推進月間の際に連携を行っております。令和5年度におはなし給食を実施し、いずれも給食センターからの提案で始まりました。

おはなし給食の内容は、本の中に出てくる料理を給食として提供していただきます。そして、給食の時間に本のあらすじと図書館のコーナーの紹介を校内放送で流してもらいました。図書館では本の展示と併せて、その日の給食の写真と献立表を掲示しました。

こちらが実際に展示したコーナーの様子と当時

の給食の献立表になります。献立と併せておはなし給食に使ったメニューと本の紹介の載せていただきました。

こちらにつきましては、今年度実施した取組状況になります。画面に出ている表は図書館本館カウンター前に設置したコーナーの主なものになります。

今年度、全国的にも暑かったので、図書館を熱中症予防休憩所として指定していただきました。併せてコーナーには図書館が熱中症予防休憩所となっているポスターや、熱中症予防のチラシと共に暑さ対策に関する資料を展示させていただきました。

2番目はJAXAと角田市の共催事業の応援事業として連携コーナーを設置しました。ロケットの関連資料のミニコーナーを設置しました。

こちらの写真は特別講演会の会場に図書館を紹介するコーナーのパネルを設置させていただいた様子です。

3番目の環境シンポジウムです。こちらは、初めての試みで、会場にミニコーナーを設置させていただきました。

こういった2番と3番のように、会場に図書館のパネルを展示することにより、催しということもありまして、イベント終了後に図書館に足を運んでくれる方もいらっしゃいました。

こちらは書架脇に設置したコーナーの一覧になります。4番目の「うめ〜梅まつり」の連携事業は角田の「5つのめ」【うめ】に関連した事業となります。12番目の「姫さまの暮らしとお道具展」も角田の「5つのめ」【ひめ】に関連した応援事業になります。こちらも全部紹介しきれないので、No.5、No.6、No.10を紹介させていただきます。

No.5の教科書展示会についてです。こちらは図書館の2階に大河原教育事務所主催の教科書展示会が開催されました。その際に受付脇に教職員向けの本を設置させていただきました。こちらは外部機関と連携した事業になります。

次にNo.6の小野竹喬展と連携したコーナーについてです。例年角田田園ホールで復刻版の美術展を開催しており、美術展に関連した資料を展示しています。今年度は日本画家「小野竹喬」と同じ時代を歩んだ「島崎藤村」「志賀直哉」の直筆原稿の複製資料を宮城県図書館から借り受けて会場に展示しました。その美術展の会場に図書館のコーナーのパネルを設置させていただきました。

No.10のアルツハイマーデー月間についてです。令和3年度から地域包括支援センターと連携し、元気作り・介護応援コーナーを常設しました。始めは小さいコーナーでしたが、利用者が多いので拡充しております。毎年、アルツハイマー月間の際にレイアウトを変更して、認知症関連資料を展示で掲示しています。この常設コーナーでは包括支援センターの相談窓口パンフレットを常備して、連絡しやすい体制を整えています。

担当課でも市の広報誌に以上の特集を掲載する際に、図書館のコーナーについても掲載いただいています。

こちらが実際の広報誌の記事です。アルツハイマーデー月間に併せた広報誌の特集ですが、下の方で図書館のコーナーを紹介していただいています。

今月(12月)から障害者週間が始まりました。それに併せて障害者週間に関連したコーナーを設置しています。こちらの障害者週間についても広報誌で図書館のコーナーについてお知らせいただいています。

障害者週間の応援コーナーについては LL ブックや手話に関する本、マルチメディアデイジー、朗読 CD 等も展示しています。

周知方法についてです。毎月月初めに特集と併せて HP で連携コーナーについても掲載しています。また、開館時間の延長に合わせて庁内インフォメーションに掲載しています。

図書館だよりの掲載や、WebOPAC でおすすめテーマとして展示資料の一覧と、簡単な各課の事業の紹介を掲載しています。

また、先ほどの写真でも説明したように、イベント会場へ図書館のコーナーのパネルを展示させていただいております。

最後に、角田市の PR キャラクター「おふでちゃん」のインスタグラムにも掲載しています。

イベント会場でのパネル設置の際に事業や講師に関連する本を会場に設置しました。

12月に開催した人権フェアでは講師の親野智可等先生の本を買取させていただき、親野先生から図書館所蔵の本にサインをいただきました。その本を今、図書館でも展示、貸出中です。

各課連携ミニコーナーを実施する上での課題になります。まず、市職員の図書館利用が少ないことです。図書館に来たことがない職員も多いです。

また、限られた人員でコーナーを実施しているため、コーナーの周知にかかる時間的余裕がなかなかありません。

今後に向けて、このような課題がありますが、続けていくことが大切だと考えています。限られた人員なので、無理なく気負わず展示コーナーを継続していければと思います。

令和3年度から実施し、庁内インフォメーションにも掲載していることから、職員にも浸透し始めています。インフォメーションを見て、職員の

方から「このコーナーいいね」と声をかけていただくことも増えました。

また、コーナーの確認に各課の職員が来館する際に初めて図書館に来たという職員もあり、利用促進にもつながっています。

最後に、当館として大事にしていることは、情報拠点として市の施策や事業と住民を、本を通してつなげること。小さな取り組みだが、継続したコーナーの設置で利用者の目に触れること。「今月もなにかまたやってるな」と思っでご来館いただくことが、当館の連携コーナーへ込めた思いです。

簡単ではございますが、当館の事例報告は以上です。ご清聴いただきありがとうございます。

総評

コーディネーター：鎌倉幸子 氏



鎌倉さん：皆さんの事例を聞きながら明日から使えるのではないかなと思うものがたくさんあったと思います。ここからはまず、3人でトークをしてから質疑応答を受け付けさせていただきますので、ぜひ会場参加の方もオンライン参加の方も手を挙げていただいたり、チャットにコメントを書き込んでいただければうれしいです。では、まずは事例発表をしていただいた3名の方にお互いの発表を聞いて学んだことや感想があれば教えていただければと思います。まずは発表した一戸町立図書館の畠山さんから、石狩市民図書館の工藤さん、角田図書館の加藤さんの順にお願いしたいと思います。

畠山さん：他館の事例発表を聞いての感想なのですが、行政や他の施設と連携した展示を行なっているという話を聞いて、当館でも他機関と連携した展示を行うことはあるのですが、それは声がかかったときに展示の協力をすることが多いです。どのように細かい事業をするかという情報を図書館として手に入れて

いるのか、そしてどのように打診して展示協力を細かく、行政でしたら課ごとに声をかけて展示しているのかなというところを、今後の参考に聞かせていただければと思って発表を聞いておりました。ありがとうございます。

鎌倉さん：今、畠山さんからどうやって情報を手に入れて展示等をしているのかという質問もあったので、もしお答えがあればそれをお願いします。それでは工藤さんお願いします。

工藤さん：そうですね。結局のところ、今までの図書館と関係していた団体とか偶然によるつながりという部分もあります。当館としても今後も色々なところに幅広くつながりを持っていかなければいけないと思うのですが、正直なところ、日常的な業務の負担もありますので、その部分はどうしても弱くなってきているところかなと思うので、もう少しアンテナを広げていかなければいけないかなと感じております。

加藤さん：情報入手に関しては、角田市は必死に情報を集めている感じです。広報誌とかホームページとか各課で色々な広報や施策をアップしてるのでそこを追っていくという感じです。石狩市民図書館さんや一戸町立図書館さんの取り組みについて導入のところで休みの日にイベント等に参加して良いところを発見するという事は素晴らしい努力だと

思います。最初は「なんで？」と思うところがあつたと思うのですが、そこをクリアして継続されてきたということにすごく敬意を表したいと思います。素晴らしいと思って聞いておりました。石狩市民図書館さんも他機関との連携ということで当館でも同じような取り組みを行っていますが、まだまだ外部で活動することができていないので、企業や大学との連携をされていることが素晴らしいなと思います。そこも最初の連携のつながりというところに苦労されたのかなと思います。鎌倉先生の御講演の中でも、図書館が地域課題解決のハブとして機能するというお話がありましたので、図書館としてもその機能を果たせるように努力できればというふうに思います。

鎌倉さん：ありがとうございました。

このような研修は自分が聞いたことをどう生かすかという、インプットとアウトプットがあつて身に付くものだと思います。ぜひ、皆様も終わった後で時間のある時にディスカッションなどを行っていただければと思っています。ここからは、地域との協働ということでお話をいただきましたので、まず私から質問させていただければと思います。図書館と地域と協働して何かを行うということは、何かしら地域の必要性があつたからこのような形でやっついこうと決断されたと思います。その地域のニーズの把握とか事業のスタートラインのところをどのように工夫さ

れたのかというところをお話いただけますか。

畠山さん：当館の地域おこし事業は10年ほど経ちました。始めた頃は、私も図書館で働いて間もなかったため、試行錯誤でやらなければなと思っていました。子育てを3人してみても一戸町を全然知らないな、公共施設に働いていて恥ずかしいなと思ったことがきっかけでした。地域のイベントに出向いて行くということも同じメンバーと出会っていて、「地方だから楽しいことができないよね」とか「遠くの都会に行かないと楽しいことないよね」という声が多く、そうではないのでは、というのが私の中に疑問であつて、自分が住んでいる町でも楽しいこと・楽しいものがあるんじゃないかなということを、施設をつなぎ役としてできていけたらいいなと。「休みの日に行つて苦労したんじゃないですか」と思われがちなのですが、自分が一番楽しんでやっできて、気づいたら10年経っていたなというところがあります。

鎌倉さん：ありがとうございます。資料の中にもたくさん苦労されたお話が書かれています。イベントもお正月まつりだけで良いのかというところで、地域人材を活用しながら地域活性化と世代間の交流を図るのだという思いとか、それがアウトカムや目標・目的なのかなと思いました。ここで、畠山さんに質問が来ていまして、計画策定的な質問なのでこの場で聞きたいと思います。「一

戸町立図書館の方に質問です。指定管理ということでしたが、お仕事体験などについて行政などから図書館でやるべきなのか？」という疑問があがってくることはなかったのでしょうか。もしあったとしたら、どのように説得したか教えてください。」という質問でした。

畠山さん：実は、紹介をしていませんけれど、行政の方にも協力をいただいております。去年だと警察官、今年だと消防士だったのですが、行政にも担当課が存在していますので、そちらに図書館で行いたいと相談したところ全面協力しますということだったので、目に見えないところでたくさん協力してくれています。例えば、今年の消防士の体験ですと、放水体験の時の水道代ですとか広い駐車場の確保という細かいところも行政の方がやってくれたので、「何で図書館がやっているの？」とクレームに近いものは言われたことはありません。ただ、いつも声をかけに行くと「何？何してほしい？」と言われることはありますが、快く協力してくださっていて、また来年度も声をかけたいと考えていることもあるので町を挙げてやっていけば良いなと思っています。

鎌倉さん：ありがとうございます。加藤さんの資料の最後にもある「継続は力なり」の成果が10年で表れているのなと思いました。では、オンライン越しの工藤さん、事業を始めるにあたって様々な企画を展示されていて、市やNPO法

人との連携の中で何か地域のニーズがあったからこそ企画だと思っております。そのような地域のニーズや必要性をどのようにアンテナを張って把握し、企画にもっていったのかという事業形成のところのお話いただけますでしょうか。

工藤さん：そうですね、例えば科学の祭典のほうなんですけども、もともと北海道大学などの退官された大学教授の方々と科学振興等の活動を行っていたサイエンスアイというグループがありまして、教育委員会とも繋がりがあり、この方々が科学振興のためのイベントを何かできないかという希望がありました。そこで、科学の祭典というイベント自体は全国で行われているのですが、このイベントに関わっていच्छやったパワフルな市内の高校の先生の「これはもう、科学の祭典をやるしかない！」という勢いが正直なところありました。この場合、企画はできてもイベントにおける事務的な部分が厳しいということがあり、その部分を教育委員会の一環として図書館でどうかと話が下りてきました。図書館としても「図書館がそこまでやるか」という意見が内部で開始当初からありました。石狩市の場合も文化ホールのような施設もないような状況で、うちと同時期に開館した北広島市の図書館は文化ホールも図書館との複合施設のようなもので、そのような施設にこういった依頼があった場合は、運営主体もまた別のところに

なった可能性はあるんですけども。
うちの場合は、石狩市の文化的な事業
に対して結構うちが公民館に話が回さ
れるということがありまして、始まり
は、なし崩しのところがあったので
すが、いざ始めてみると市内の大学の
先生なり業者の方なり、こういう企画
をしたいとかそういう能力のある人が
地元で眠っているということがかなり
分かってきました。そういう方々の御
協力を得ながら、また、そういう方か
ら別の方を紹介されてというような、
最終的にはこういうものは対人と人との
ネットワークが大きいものだとい
うことを科学の祭典では特に感じたところ
です。最終的には対個人とのつなが
りなのかなと思います。



鎌倉さん：工藤さんありがとうございました。高
校の先生や大学の先生など企画をやり
たい方など芽づるで人と人との繋がり
つつ行われたのですね。図書館対法人
ではなく人と人との繋がりを大切に
関係構築したからこそニーズも聞けるし、
悩みも聞けるしで企画になっていくと
いうお話ありがとうございます。また、
指定管理だからなぜ図書館がやるの？
と先ほどの質問がありましたが、工藤

さんの直営だけなぜ図書館がやる
の？という突っ込みが結局ある中で、
加藤さん、すべてを受けてこれに対し
ての事業形成についてのお話願いま
す。

加藤さん：そうですね。利用者からのニーズの把握
と言うよりは行政が行っている施策の方
からこれは住民にとって伝えたほうが良
い情報ではないかというところから当館
では行っております。ただ、各課の方へ
声をかける際に最初は少し身構えられま
す。仕事が増えるのではないかと不安
もありますので、なるべく担当課の負
担にならないように図書館のほうでも気
を配って実施しています。担当課にとっ
ても住民への利用促進・理解の深まりと
いう部分を説明しながらお互いにとって
良い関係が作られるように説明をしなが
らオーダーのほうを作っているところで
す。なぜやるのということの答えには
なっていないかもしれませんが。

鎌倉さん：お互いにとって良い関係で行うとい
うことは、それこそ加藤さんのプレゼン
テーションであったような市民のため
というところからスタートして行政と
連携をして情報を出されて、まさに誰
のためというところがあって、そのた
めに情報をどうやって届けるか、かつ
一緒に行う人とはウィンウィンでいた
いという愛情を感じました。ありが
うございました。

次の質問です。「協働良いですよ」とか
「町に開ける図書館」と言いながら、
やはりリスクや苦労があったと思いま

す。苦労があったけれど、こうしたら解決したとかより良くなったとか、特に印象深いエピソードを一つお願いしたいと思います。

加藤さん：当館の取組は小さいものですので、あまり大きい苦労というものはないのですが、先ほども申し上げましたが、各課にコーナーの打診を持ちかけるときに「何かやらされるのでは？」という身構えが多かったと思います。最近では少し浸透してきたということもあって、快く引き受けていただけたり、逆に担当課の方からコーナー設置の依頼があったりということも増えてきました。それからもう一つ大変なのは、事業を宣伝するという点で各課の事業内容を把握しないといけないことです。あまり難しい本を置いても手に取ってもらえないですし、ただ各課が使いたいというところも併せていろいろな本に反映させていくというところが工夫を重ねるところです。コーナーの表示を作る際も足を止めてもらえるように興味を引くような表示の作り方に苦労しているところです。



畠山さん：事業をしていく中で苦労と言えば、職人肌の方々のイメージで、図書館は本

を貸して返却する施設なのに、なぜ人を集めて事業するのかと10年前はよく言われました。想像がつかなかったようで「自分の仕事を教えて何になるのか」ということがあったようです。でもそういう方々が地域で働いていて、そういう仕事があるということを知っている方々に知ってほしいなというところがありました。もちろん当時も展示コーナーや関連した読み聞かせをして図書館も連携事業をしていましたが、口下手な職人さんも多く、人前で話すのが苦手だという方もいらっしやったので、そこは私がフォローして話しながら職人さんは作業だけするということを繰り返し行っていました。その中で、私もこういった方々を支えるにはどうしたら良いかということを考えて、事前に訪問して作業を動画で撮影し、それを映しながら、その前で同時進行で実演しということを行うなど試行錯誤で10年間勉強してきたと思っています。今は、「お仕事体験」というイベントを続けて3年間担当しているので求められているものが大きくなってしまい、プレッシャーを感じているので少し休みたいと本音では思っていたけれど（笑）「地域の方にも来年は何をやるの？」と言われているので、いろいろまた勉強しながら、そして今回の研修も参考にしながらやっていけたらと思います。

鎌倉さん：ありがとうございます。では、工藤さん。直面した御苦労やその解決法があ

ればお願いします。

工藤さん：そうですね。郵便局の方の除籍本コーナーの設置に関しましても、私は正直最初は企画としては良いけれども、いざ動かしてみると除籍する本を個々の郵便局に回して、郵便局の方ではお読みになった本はできれば戻してほしいですが自由に持っていて構わないですよ、という流れにしましたので、そのあたりのサイクルがうまく構築できるのかという不安がありましたが、結局動くことになりました。なお最終的には石狩市内の郵便局ほとんどに協力していただけることになりましたので、除籍した本の在庫が適時あって、不足があれば各郵便局に在庫を回せるのかというシステムづくりに担当者が苦労したようです。幸いなことに、いきなり本がなくなったり、必要になったりということは今のところありません。ただ、最初に御説明したとおり、石狩市は合併したことによって縦長なんですよね。これは例えば、市の真ん中に図書館があって、放射状的に各方面に回れば良いですが、うちから浜益までだと車で2時間くらいの長距離を行かなければならないので……。うまく結論付けられないのですが、企画を通してしまうとやめられない役所の宿命のようなものがあるのでできるだけ最初にうまくシステムとして回るようなものを構築できるかどうか肝なかなと思います。

鎌倉さん：ありがとうございます。始めたら逆に

もうやめられないというのは……。一戸町立図書館さんの10年やっていて疲れているけれど、また来年もあるというふうなうれしい叫びでもあり、振り返る時がくるといような……。畠山さん、うなずいてらっしゃるので一言どうぞ！

畠山さん：多分始めにやる時は、みなさんそうだと思うんですけど必死で、どうにかその人を説得できたらいいなとか、石狩市民図書館さんも同じだと思うのですが企画したらやらなければいけないという使命感で必死にやっていたなと皆さんの話を聞いて思っています。今だと、畠山に声かけられたらやるしかない！ と思っている地域の人々が少しずつでも増えてきたのはうれしいことでもあり、次はなにをやるかという毎年のプレッシャーもあり、でも楽しみにしてくれている地域の方々がいるというのは、自分が十年間やってきた成果もあるのかなという。励みにもなっています。

鎌倉さん：ありがとうございます。もう時間が経つのは早く、終了5分前になりましたので質疑応答、コメント、感想なんでも大丈夫ですので挙手などお願いします。



日野さん（白石高校）：白石高校図書館の日野です。今日は大変貴重なお話をありがとうございました。一番最初の鎌倉さんの基調講演のお話の時に思ったのですが、アウトカムの指標ってどうやったら良いんだろうと。最後に一戸町立図書館さんが待っている町の人がいるから頑張ろうという気になるというお話をされていて、それも指標の一つになると思うのですが、それ以外にもどうやって指標を設定したら良いのだろう、指標をはかったら良いのだろうということをぜひ、お話いただきたいと思っています。

鎌倉さん：ありがとうございます。細かいテクニカルなお話をすると、アウトカム、いわゆる成果目標を作ってそれをはかる指標を作らなければいけないです。それがないと本当に達成したかしないかが分からないので、基本的に指標を作ります。指標を作る際の話なのですが、いろいろなやり方があるのですが、私は逆からにします。例えば病気の予防をする、健康になるということが目指す目標だとすると、なぜその目標を設定したか、というと不健康で病気がちな状態だからです。そうであれば、不健康だということから考えていて、風邪をひくと不健康だし、おなかを壊すと不健康だし、地域によっても、高血圧の方が多くて不健康だというのもあります。地域性があるとなると、血圧が150から100になることで達成したという指標になる。まずは、地域の課題を洗い出して、その課題を

逆にすると目標になる。指標成果から書くと分かりづらいので課題を裏返してどういう状況が理想なのかを指標にしていく、そういうやり方をしていくと悩まずできるはずです。図書館の場合、解決課題でもあり、価値創造でもあるわけです。価値創造で「協働文化を理解する」というのがあったとしたら、なぜそれを掲げているかということ、協働文化を理解していない子供が増えている、協働文化を理解しないとどうという課題があるか、例えば、地域の子供のアイデンティティが少し低いかも、というようにするならば、それを指標に設定して、学校と協力してデータを収集するとか。裏返しながら考えていくというのがテクニックです。

それでは、お時間になりました。

ありがとうございます。

本当に去年や今年の話ではなく、長きにわたる活動ですね。加藤さんの継続は力なりと、それも畠山さんの待っている人があるからこそそのことでもあり、工藤さんは「なぜ図書館？」と言っても、やはり図書館は社会教育の拠点であるという、まさに図書館の存在意義をしっかりと踏まえているからこそ、堂々と企画などができているのだなと思って聞いていました。ぜひ皆様も今日の学びを明日の業務等に生かしていただければ幸いです。本当に今日は御参加ありがとうございます。これでセッションを終わりたいと思います。ありがとうございます。

た。

主催者挨拶

宮城県図書館長 青木直之

宮城県図書館 館長の青木と申します。本日は、お忙しい中お集まりいただき、誠にありがとうございました。閉会に当たりまして、一言御挨拶を申し上げます。

御承知のとおり、図書館を取り巻く社会情勢が変化し、図書館に対する期待が多様化しており、地域社会における図書館の果たす役割は、ますます大きくなっております。こうした中、本日の令和6年度北日本図書館連盟研究協議会兼宮城県公共図書館等職員研修会は、研究主題を「多様な学びや活動を支える図書館」とし、北海道及び東北6県の公共図書館をはじめ、学校図書館や大学図書館など、たくさんの皆様に御参加いただきました。

基調講演にはじまり、事例発表や総評・意見交換等の時間は、まさに今後の図書館の在り方に対して大いに参考になったものと思います。本研究協議会を契機として、それぞれの図書館がその地域の実情に合った形で、様々な団体との連携を進めて行かれることを期待しております。

今回、快く基調講演及び総評・意見交換等のコーディネーターをお引き受けいただきました鎌倉様、また、事例発表をしていただきました一戸町立図書館畠山様、石狩市民図書館工藤様、角田市図書館加藤様には心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

本日は大会資料と併せて、観光案内のパンフレットなども皆様方のお手元に配布してございます。ぜひ、お時間の許す限り、県内各地へ足をお運びいただければ幸いです。

結びになりますが、本日ご参加いただきました皆様方に、感謝申し上げますとともに、皆様方の図書館のさらなる発展を祈念いたしまして、閉会の挨拶といたします。本日はありがとうございました。

次期開催県挨拶

福島県立図書館長 深谷一夫

皆様、こんにちは。ただいまご紹介いただきました、福島県立図書館長の深谷と申します。次期開催県を代表いたしまして一言ご挨拶を申し上げます。

本日はここ宮城県におきまして、「令和6年度北日本図書館連盟研究協議会」がこのように多くの参加者のもと、盛大に開催されましたことをお慶び申し上げますとともに、この素晴らしい会を企画・運営された宮城県図書館の皆様には感謝を申し上げます。

先程、基調講演をいただきました鎌倉先生、そして事例発表をいただいた皆様からは、示唆に富む大変意義深いお話を伺うことができました。

来年の研究協議会は、私ども福島県立図書館でお引き受けをさせていただきますが、今回のような素晴らしい会となるよう、精一杯準備を進めて参りたいと思います。

多くの皆さまにお越しいただき、福島県の歴史や文化、食なども堪能していただければと思います。

来年はぜひ福島県へお越しください。お待ちしております。本日は、ありがとうございました。

令和 6 年度北日本図書館連盟研究協議会
兼宮城県公共図書館等職員研修会Ⅲ
記録集

発 行 日 令和 7 年 5 月 22 日
編 集 ・ 発 行 令和 6 年度北日本図書館研究協議会
実行委員会事務局（宮城県図書館内）

〒981-3205 宮城県仙台市泉区紫山一丁目 1 番地 1
電 話 022-377-8441（代表）
F A X 022-377-8484
<https://www.library.pref.miyagi.jp>